SFC ディスカッションペーパー
SFC-DP 2013-003

「幸せ」をとらえる一視点：個人と社会の関連

–近刊書 3 冊を手がかりにして–

岡部光明

慶應義塾大学名誉教授
明治学院大学非常勤講師

okabe@kvp.biglobe.ne.jp

2013 年 10 月

「幸せ」をとらえる一視点：個人と社会の関連[1]

―近刊書 3 冊を手がかりにして―

岡部光明

【概要】幸せ（happiness）とは、一般的にいえば人が精神的ないし感情的に良好な状態（well-being）にあることを意味するが、その程度や態様は人により、また時により異なるやや曖昧な概念である。このため、古代アリストテレス以来、多くの賢者が考究してきており、それに関する書籍も数多い。本稿では、それらを幅広く展望するのではなく、比較的最近国内で刊行された 3 つの書物、すなわち (a)経済学者による書物（橘木、2013）、(b)文化人類学者による書物（辻、2008）、(c)宗教思想家による書物（高橋、2011c）を取り上げることを通じて、個人にとっての幸せだけでなく、その社会との関連を一つの視点として加えつつ若干の考察を行った。その結果、次のことを主張した：(1) 幸せを捉える場合、経済学では書物(a)に見られるように伝統的に個人の幸せ（特に所得や消費）が中心になる一方、文化人類学(b)では経済的な豊かさ追求がむしろ不幸せをもたらしているという認識がなされている。(2) 書物(c)では個人レベルでのすがすがしい生き方という意味での幸せ（ミクロ）と社会としての幸せないし発展（マクロ）の双方が同時に達成されるという思想がその実践方法とともに説かれている。(3) 書物(c)の主張は論理的に明快であるうえ多くの個人による実践事例から有効性が確認されており、今後その思想が広まれば日本が抱える各種社会問題の解決に資する可能性があるので総合政策学に一脈通じる面を持つ。

はじめに

幸せとは何か。これは、古今東西を問わずおそらく人間にとって最も重要なテーマの一つであり、このため古代アリストテレス以来、多くの賢者が考究してきた課題でもある。したがって、それに関する書籍も国内外で非常に多い[2]。本稿は、先人たち

---

[1] 本稿は慶應義塾大学大学院セミナー（2013 年 10 月 2 日）で発表する機会を得た。その際に香川敏幸氏（慶應義塾大学名誉教授）、秋山美紀氏（慶應義塾大学環境情報学部准教授）をはじめセミナー参加者から有益なコメントと提案をいただいた。また渡辺一雄氏からは広範囲にわたり多くのご意見と提案をいただき、当初原稿を改定することができた。ただし、本稿に含まれる誤謬や不完全さは全面的に筆者に帰属する。

[2] 例えば、書名に幸福（論）と銘打って日本語で刊行されている書物に限っても、ショーペンハウエル『幸福について』、アラン『幸福論』、ラッセル『幸福論』、ヒルティ『幸福論』、ヘッセ『幸福論』、

の幸せについての思想を幅広く展望することを意図するものではなく（もとよりそれは筆者の能力をはるかに超える）、また近年盛んになっている国別に見た幸福度順位について議論をしようとするものでもない[3]。むしろ、比較的最近国内で刊行された3つの書物（経済学者、文化人類学者、宗教思想家よる合計3冊）を取り上げることを通じて、幸せという問題に一つの考察を加えることを意図したものである。

その3冊とは、(1) 経済学者である橘木俊詔による『「幸せ」の経済学』(2013)、(2) 文化人類学者である辻 信一による『幸せって、なんだっけ―「豊かさ」という幻想を超えて―』(2008)、そして (3) 宗教思想家である高橋佳子による『魂の発見―時代の限界を突破する力』(2011c)、である[4]。

これら3冊のうち、(1) および (2) は書名が示す通り幸せとは何かを直接問題にするものであり、また従来たいていそうであるように個人にとっての幸せを基本的な視点としている。これに対して (3) は「本当の豊かさとは何か。本当の安全とは、そして本当の幸せとは何なのか」[5]などを問題としており、多少性格を異にする面があるが、広くとらえれば幸せを論じているので、ここで取り上げることとする。本稿では、個人の幸せに加え、その「社会的関連性」も加えつつ3冊を位置づけ、そして幸せを考察する。ここで、個人の幸せの社会的関連性という場合、それは二つの側面を持っている。一つは、社会や制度など個人を取り巻く条件が個人の幸せを左右する側面である。もう一つは、逆に、個人の幸せの変化が社会や制度など外部世界をどう左右することになるか（どう変えてゆく可能性があるのか、あるいはないのか）という側面である。この二つの側面を考慮する点に本稿の特徴がある。

以下、1節では、幸せを考える上で手がかりとする上記3冊の概要を紹介する。2節では、これら3冊それぞれの特徴をまとめるとともに、個人の幸せの社会的関連性（社会性）という視点をも加味しつつ3冊を位置づける。3節では、個人の幸せとその社会的関連を併せ持つ点で注目すべき主張である高橋(2011c)を取り上げ、その先端性や具体性につきやや敷衍して説明する。最後の4節は要約である。なお、末尾には、本文に関連する内容の付論を二つ添付した。

福田恆存『私の幸福論』などがある。また幸福に関しては、宗教、哲学のほか、近年は生物学、心理学、脳科学、文化人類学、経済学など幅広い分野から研究がなされつつある。

[3] 後者については、すでに岡部（2013）においてやや詳細かつ網羅的に議論した。

[4] 以下本稿では、論文の標準様式に従うこととし、敬称は省略する。また、例えば橘木（2013）とは、本稿末尾の引用文献リストで示される橘木俊詔による2013年刊行の著作を意味する。

[5] 高橋（2011c）12ページ。

１．手がかりとする３冊の書籍の概要

ここでは、以下の考察において手がかりとする書籍3冊の内容をまず要約する。なお、これら各書籍については、その要約に加え、次節で述べる位置づけも含めた概略を図表１としてまとめておいた。

橘木（2013）の議論

第1冊目として、経済学者である橘木（2013）の最新書籍を取り上げよう。ここではまず、経済学の標準的考え方では「人々の幸せは所得（あるいは消費）の増大によって達成される」ことが前提になっていることが指摘され、それを基礎とした思考方法が紹介される。しかし、幸福度に関する世界各国の社会調査によれば（1）人々の幸せは所得（消費）の増大だけで得られるものでないこと、(2）幸せには所得水準のほか、平等意識、将来の安心感、余暇、趣味、労働、さらには個人の性格（外向的な人は幸せと感じ易い）など多くの要素が関連していること、が強調される。そして近年はそうした要素を勘案した幸福度に関する各種指標が開発されており（国連による人間開発指数、OECDによる幸福度指標、ブータン王国の国民総幸福GNHなど)、それらによれば日本人の幸福度は、全世界においても、また先進国においても、概して中位に位置する結果となっていることが紹介される。

次いで、多くの調査において世界で最も幸福度が高いとされるデンマークが取り上げられ、その歴史的、文化的、制度的な検討をした結果、その理由は経済の強さ（競争原理の重視、労働市場の柔軟性等)、家計所得の高さ（失業保険制度の充実、女性の高い就業率等)、そして所得分配の平等さ（税と社会保険料に関して高い国民負担を課すことによって平等性を実現)、にあると結論している。

では、日本国民の幸福度を高めるには、どうすればよいのか。著者によれば、人々はもはや経済的豊かさだけで幸せを感じなくなっているので、今後は（1）成長経済よりも定常型経済を指向するとともに所得や資産の格差を縮小すること（欧州型の福祉国家指向)、(2）環境問題に対応する一方、生活の質への配慮を高めること、(3）自由時間を多くして余暇を楽しむこと（自然との交わり、生活美の精神、茶道などの道、漫才や落語、スポーツ、音楽、絵画、旅行等)、などが幸せを高めると主張している。

表１　３つの書籍の主要論点とその特徴

著者	書籍名	主な主張	特徴
橘木俊詔 [経済学者]	『「幸せ」の経済学』 2013 年	・経済学では、個人の幸せは消費（所得）の増大によってもたらされることが前提とされる。しかし、幸せは消費の増大だけで得られるものでない（これは日本を含む世界各国の社会調査の結論）。 ・幸せには、所得水準のほか、平等意識、将来の安心感、余暇、趣味、労働、さらには個人の性格（外向的な人は幸せと感じ易い）など多くの要素が関連。 ・日本国民の幸福度を高めるには、所得を増加させるよりも、社会保障を充実させる一方、自由時間の確保、余暇の積極的活用などが必要。	・幸せとは、消費増大で得られる効用の最大化だとする主流派経済学からは一歩前進した視点を提供。また、幸せを左右する要因をアンケート調査で調べ、それを統計的、客観的に解明（科学性）。 ・主眼はあくまで個人の幸福であり、社会制度や政府はその増進主体という位置づけ（経済学の個人主義的思想を踏襲）。 ・今後は余暇を楽しめ、というのが基本提案だが、それが果たして永続性のある深い幸せにつながるかどうかの議論、また著者提案が持つ社会的含意についての議論は欠落。
辻 信一 [文化人類学者]	『幸せって、なんだっけ−「豊かさ」という幻想を超えて』 2008 年	・物質的豊かさの追求は、人々の幸せを増すどころか、逆に多面的な不幸せ（競争への脅迫、過労死、所得格差増大、国土の醜悪化、地球温暖化など各種の不満や不安）を増殖する最大の要因として作用。 ・経済の成長や発展を重視する従来のマインドセット（思考の型）から抜け出し、いまや魂のあるつながり（地域社会、コミュニティ、家庭、友人関係等）を大切にする思想への転換が不可欠。そこに本当の豊かさと幸せへの道がある。 ・このつながりは、お金やモノの増大によっては達成できず、たっぷりとした時間を持つこと（スローライフへの文化変革運動）によって達成可能。 ・上記の動きは、米国をはじめ日本でも急速に広がりつつあり、個人のこうした行動（自己満足と自己実現を重視）が大きな社会変革をもたらすと期待。	・現代主流派経済学の思想（経済成長・開発の優先、競争至上主義）とそれが政策的に推進された結果、いかに人々の「幸せ」に背馳する事態が発生したかを鋭い社会観察によって描写。 ・豊かさは数値化可能である、豊かさの延長線上に幸せがある、と前提する上記経済思想はイデオロギー（信仰）だとして糾弾、それを乗り越える本来の豊かさとその姿を具体的に提案。 ・一人ひとりの価値観ならびに暮らしのスタイル転換（文化変革運動）によってつながりのある社会が取り戻され、そして幸せがもたらされるとしているが、個人の転換、そしてその結果としての社会の転換がどのようにもたらされるのかは不明瞭。
高橋佳子 [宗教思想家]	『魂の発見―時代の限界を突破する力』 2011 年	・いま必要なのは本当の豊かさ、本当の幸せとは何かを明らかにする新しい価値観、新しい生き方。それはまた、衰弱した日本を再度活性化する道をも示すものである必要。 ・この２つに同時対応しようと思えば、それは人間の心よりもさらに源の領域に潜むエネルギーを開放することによって可能となる。それは人間にとって快苦や利害を超えるときに現れる根源の力（相手の声を聴く力、見えないエネルギーを見る力、共感する力、拒む力、直感力等）であり、それは各人に天与の贈り物として与えられている。 ・問題は、多くの人がそのエネルギーを開放できないままでいる点。なぜなら、各人の人生にはそれぞれ呪縛（宿命）があることによる。そうした呪縛から開放される具体的方法はすでに開発されており、それによって心の鍛錬をすれば根源的エネルギーが発露してくる。 ・著者が主催するグループでは、多種多様な立場や分野の人々が集まっており（海外も含む）、鍛錬の結果、各人の人生が大きく変わる（すがすがしい生き方を発見する）とともに、家庭、職場、日本、そして場合によっては国境を越えた貢献につながるといった実績が増大中。	・個人レベルのすがすがしい生き方、社会としての幸せ（発展）の双方を同時に追求する思想であり、かつその実践方法も提示している点は斬新で類例がない。思想としての深さ、論理の明快さも特徴。社会の先端的ないし知的仕事に関わる人々の賛同者が多い。 ・この思想と実践方法はすでに著者による多数の書籍によって提示されているほか、各種セミナー、講演会など多面的な学び・鍛錬の場を提供。 ・この価値観と生き方が持つ力は、多くの実践事例（ケース・スタディ）によって確認（著書にはその詳細な記述を含む）。 ・ただ、人間の心よりも奥にある根源の力が「魂」と称されている点は、人によってはその用語になじみにくさを感じる可能性。

4

辻（2008）の議論

第２冊目は、文化人類学者である辻（2008）の書物である。ここではまず、日本を含む先進国において「幸せ」がほとんど無意識のうちに物質的な「豊かさ」と同一視され、その結果、物質的豊かさの増大を追求すること（経済成長）が社会の目標となっていることが指摘される。そこでは、アメリカ型の消費者主義（消費者が保有するモノに企業が不満をいだかせることによって消費と生産を拡大させる仕組み）が組み込まれることになり、したがって経済発展ないし経済成長は自然破壊的、強圧的、暴力的なプロセスとなるにもかかわらず、経済発展の推進がイデオロギー（信仰）となってしまっていることが主張される。

このような豊かさ追求は、人々の幸せを増すどころか、逆に各種の不幸せ（競争への脅迫、過労死、所得格差増大、国土の醜悪化、地球温暖化等）を増殖する結果をもたらしていることが様々な事例によって強調される。そして、このような不幸せを示す各種現象は、「豊かさにもかかわらず」発生したというよりも「豊かさ（の追求）ゆえに」発生した現象である、と理解する必要があると主張している。

こうした現実から抜け出すにはどうすればよいのか。それには「経済成長」という信仰に参加するのをやめれば良い、というのが著者の結論である。つまり、経済の成長や発展を重視する従来のマインドセット（思考の型）から抜け出し、自然や文化という本当の豊かさを追求する思想への転換（「豊かさの経済学」から「幸せの経済学」への転換）が不可欠の条件であるとしている。より具体的には、魂のあるつながり（地域社会、コミュニティ、家庭、友人関係等）を大切にする思想への転換を主張、そうすることによって本当の豊かさと幸せへの道が拓ける、としている。そして、初期の経済学者（A. スミス、J. S. ミル）は文化、節度、精神性、人間的な価値など、本当の豊かさとそこから生まれる幸せを重視していたにもかかわらず、現代の経済成長論者はその伝統を全く無視している、として現代経済学のあり方を手厳しく批判している。

具体的に対応する方策は何か。著者は、上記の各種「つながり」はお金やモノの増大によって達成できるものでは決してない一方、文化の本質は「時間」に他ならないとして、今後人々がたっぷりとした時間を持つこと（スローライフへの文化変革運動）によって幸せが達成できる、と主張している。そしてそうした動きはアメリカのほか日本でも急速に広がりつつあると指摘、それに期待を寄せて本書を結んでいる。

高橋（2011c）の議論

第３冊目は、宗教思想家である高橋（2011c）の書物である。著者はまず、物質的豊かさは目標になりえても目的（目指すべきもの）にはなりえないと指摘、いま必要なのは本当の豊かさ、本当の幸せとは何かを明らかにする新しい価値観、そして新しい生き方であると強調する。そして、そうした価値観と生き方は、個人にとって本当の幸せをもたらすだけでなく、凋落し衰弱した日本（「第三の国難」[6]に遭遇している日本）を再度活性化する道をも示すものでなくてはならない、と主張している。

この２つに同時に対応できる方法は、人間の心よりもさらに源の領域にあるエネルギーを開放することであり、それによって現に可能となる、というのがその基本的な主張である。そのエネルギーとは、人間にとって快苦や利害を超えるときに現れる根源の力（相手の声を聴く力、見えないエネルギーを見る力、共感する力、拒む力、直感力等）であり、それは各人に天与の贈り物として与えられていると著者は考えている。そして問題は、多くの人がそのエネルギーを開放できないままでいる点であると指摘、その理由として、各人の人生にはそれぞれ呪縛（宿命）があることによるとの解釈を示している。

そして、そうした呪縛から開放されるためには、心の鍛錬（後述）が必要であることを強調するとともに、その具体的方法はすでに著者によって開発され、本書や既刊書物あるいは各種セミナーで提示してある、と述べている。それによって心の鍛錬をすれば、新しい判断と行動を自らの血肉にすること（自分の人生の主導権を取り戻すこと）ができ、個人がほんとうに幸せになるだけでなく人間の持つ根源的エネルギーを発露でき、その結果、その行動が周囲や所属組織の行動を変えてゆくので社会が直面する各種問題の解決（社会の活性化）も同時にもたらされる、と説いている。

現に著者（高橋）のこの思想に共感し、それを実践しようとする人々は次第に大きなグループを形成しており、その環は広がりつつあるとしている。こうした運動への参加者には、多種多様な立場や業界（海外も含む）の先端で活躍する人々が含まれており、鍛錬の結果、参加者各人の人生が大きく変わる（ほんとうの幸せを発見する）

[6] 第一の国難は、幕末における黒船来航と開国要求に伴う国内への衝撃、第二の国難は、太平洋戦争での敗北と国土の焦土化、そして第三の国難は、バブル経済崩壊後における日本の凋落と衰弱（そして東日本大震災による追い打ち）、だとしている(高橋 2011c：14 ページ)。

とともに、家庭、職場、日本、そして場合によっては国境を越えた貢献にもつながる、といった実績が出ていることが本書のほか既刊書籍（高橋 2002、2009 ほか）で数多く記述されている。

２．上記３冊の特徴と位置づけ

ここでは、まず上記３冊の特徴を整理するとともに、それらはどう位置づけられるかを考えたい（前掲図表１の右欄を参照）。その場合、個人の幸せ（個人性）だけでなく、もう１つ別の視点、すなわち個人の幸せが社会のあり方とどのような関連を持つかという視点（社会性）をも考慮する。

（1）３冊それぞれの特徴点と位置づけ

第一に、経済学者である橘木（2013）の論説は、従来の主流派経済学における基本認識（消費増大で得られる効用最大化と幸せを同一視）は社会調査から得られる現実を現すものでないとしている点で、標準的経済学の前提から一歩前進して広い視点を提供している。そして、幸せを左右する各種要因をアンケート調査等に基づき統計的、客観的に解明しようという視点に立っていること（科学性）も特徴的である。

一方、議論の主眼はあくまで個人の幸福であり、社会制度や政府の活動はその増進手段という位置づけがされている。つまり、この点では経済学における標準的な個人主義的思想を踏襲した議論にとどまっている。また、結論的には「今後は各人が余暇を楽しむべし」としているが、そのことが果たして個人にとって永続性のある深い幸せにつながるかどうかの議論、また各人がそうした行動を取った時の社会的含意に関する議論はまったく欠落している。

第二の書物である文化人類学者の辻（2008）においては、現代主流派経済学の思想（経済成長・開発の優先、競争至上主義）の特徴とそれが政策的に推進された結果、いかに人々の「幸せ」に背馳する事態が発生したかが鋭い社会観察によって描写されている。また、こうした主流派経済学の前提（豊かさは数値化可能であり豊かさの延長線上に幸せがあるとする前提）は、価値から自由になった科学というよりもむしろ一つのイデオロギー（信仰）だとして現代経済学を厳しく糾弾するとともに、それを乗り越える本来の豊かさと幸せの姿を著者なりに具体的に提案している点が特徴的である。そして、こうした姿を実現するには、一人ひとりの価値観ならびに暮らしの

スタイル転換（文化変革運動）が必要であるとし、ビジョン実現のための具体的方法に言及している点も独自性があろう。なお、辻(2008)が重視するつながりをはじめ、節度、精神性、人間的価値など主流派経済学とは異なる前提とビジョンを持った経済学のあり方として、仏教経済学という提案がある[7]。その詳細は本稿末尾の付論１を参照されたい。

一方、著者はそうした草の根運動によってつながりのある社会が取り戻され、幸せがもたらされるとしているが、果たして個人の価値観の転換、そしてその結果としての社会全体の価値観転換がどのようにもたらされるのかは、本書で不明瞭にとどまっている。

第三の書物である宗教思想家の高橋（2011c）が提示する視点の特徴は、個人レベルの幸せ、社会としての幸せ（発展）の双方を同時に追求する思想であり、かつその実践方法も提示されている点にある。これは斬新であり、他に類例がない。また思想としての深さと幅広さ[8]、そして論理の明快さも特徴的であり、このこともあってこ

---

[7] 幸せ（経済的幸福）は、下記のように財（欲望の対象）を分子とし、欲望を分母とする分数で示すことができるという考え方がある（井上 1994：127 ページ)。

$$\text{幸せ} = \frac{\text{財}}{\text{欲望}}$$

この式をもとに考えると、分子を大きくすることによって幸せになろうとするのが欧米的（ないし正統派経済学的）理解であるとすれば、分母を小さくすることによって幸せになろうとするのが東洋的（ないし仏教経済学的）理解といえる（井上 1994)。正統派経済学の発想と分析にはまさにこの解釈が成り立つ。ちなみに、付論２の（2）式は上式の意味そのものであり、また（3）式は上式分子を（例えば）平方根の値で考えた時（下式の場合）の条件を示している。前述した橘木（2013）は、分子に財のほか各種サービス（市場的サービスおよび非市場的サービスの両方を含む）を付加することによって幸せを理解する立場であり、したがって欧米的理解の枠内にとどまっている。一方、辻（2008）は分母に新しい価値観やライフスタイルを加味して理解する立場であり、したがって広義で東洋的な理解に属するといえる。

一つの注目すべき見解として、財の多寡（上式の分子）を重視するのではなく、人間が生きる上では、より多くの選択肢（capabilities）があり、かつ選択が自由であること（well-being freedom）こそ幸福に他ならないという考え方（Sen 1985：185-203）がある。これはインド出身の経済学者アマルティア・セン（1998 年にアジア人として初のノーベル経済学賞を受賞）の主張であり、幸せ（well-being）に関する一つの東洋的理解といえる。

なお、上記の定義式ははなはだ興味深いものであるが、井上自身がこの式を考案して提案したかどうかは必ずしも明白でない。井上(1994)の別の箇所（150 ページ）では、この出典はカーライルによるものであることを間接的に援用していることを示唆する記述があるが、筆者（岡部）がカーライルの著作（日本語版および英語版）を検索した限りにおいては、カーライルがこの発想（分数式）を記述した形跡を見つけることはできなかった。

[8] ちなみに、東日本大震災のあと著者（高橋）はこの二つの思想を美しい詩として編んで３冊の書物にしており（高橋 2011b、2012、2013)、それを被災者および日本人全体に希望を託すかたちで提示している。

の思想には、前述したように社会の先端ないし知的な仕事に関わっている賛同者が多いのも特徴である。さらにその実践方法も、著者による多数の書籍で提示されているほか、各種セミナーや講演会など、多面的な学びの場ないし心の鍛錬（物事の受け止め方や行動を歪みのないものにする努力）の場が提供されている。このため、この思想と生き方が持つ力は、多くの実践事例（ケース・スタディ）によって確認されているといえる。

なお、人間の心よりも奥にある根源の力（知恵持つ意思のエネルギー）のことを高橋（2011c ほか）は「魂」と称しているので、人によってはその用語になじみにくさを感じる場合があるかもしれない。

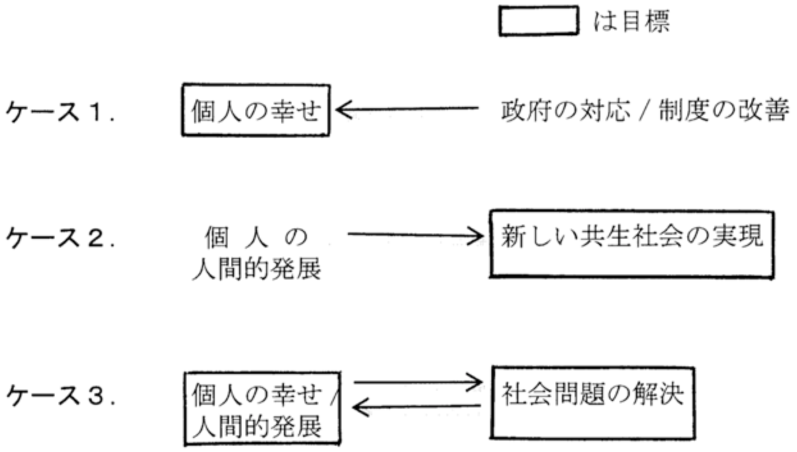
（2）個人の幸せと社会の関わり（その１）

幸せとは、通常は個人がどう思っているかの問題であるので、幸せを考える場合には個人についての議論が出発点となる。これは、従来からそうであり、また上記 3 冊においても共通している。しかしここでは、幸せを単に個人の問題として捉えるだけでなく、個人の幸せとその社会的関連を一つの論点として加えてまず上記 3 冊の特徴を模式的に考察したい。

橘木（2013）の議論

こうした視点から理解するならば、橘木（2013）の論旨は、図表２のケース１のような考え方であると理解できる。すなわち、人間社会における目標は個人の幸せであり、政府や制度など個人からみた外部要因はあくまで個人の幸せを向上させる手段である、という認識である。これは、現代主流派経済学が基本に据える社会観にほかならない。そこにおいて個人の幸せは満足度（効用）と等値され、後者は（a）自分が享受できる財やサービスの量に依存する、(b）そうした財やサービスはすべてカネで買える、(c）そうした財やサービスの量が多ければ多いほど向上する、(d）ただし満足度の増え方は財やサービスの量が増えるに従って小さくなる、という前提が置かれる。つまり個人主義かつ功利主義の考え方であり、これがすべての議論の出発点になる。

図表２　個人の幸せとその社会関連性



（注）筆者作成。

確かに橘木（2013）では、このうち前提（b）については通説より緩められており（今後はスポーツや趣味などカネで買えないことを楽しむべきだと主張）、このため主流派経済学にとらわれない一歩踏み出した見方をしている。一方、個人の幸せを捉える場合、あくまで前提（a）と前提（c）は崩していない。また前提（d）は明示的に議論されていないが、カネで買えるものを増やすよりも今後は趣味などカネで買えないものを重視すべきとする議論は、前者について暗黙のうちに前提（d）を想定しているといえる。つまり橘木（2013）は、広い意味において自分が享受できるモノや事柄が多ければ多いほど望ましい（より幸せである）という理解の仕方、あるいは「もらう幸せ、得る幸せ」という見方は崩さずに踏襲している。この二つが特徴である。上述した主流派経済学の議論と橘木（2013）の議論をやや厳密に展開すれば、本稿末尾の付論２のようになる。

現代の主流派経済学（ことにミクロ経済学）は、人間について上記４つの前提を置くことによって成り立っている。このため、こうした前提が理論分析（とくに数学的展開）を行いやすくしているうえ、人間の行動ないし社会を特定の一面からシャープに切り取って見る視点を提供していることは事実である。その半面、本来多面性を持つ人間とその行動に対して狭隘な視点からしか見ない結果をもたらしていることは否めない。また、上記前提自体は単なる前提であるにもかかわらず、それが人間の本質であるとする誤解を生じさせている場合もある。これらの点は経済学のあり方の本質論に関わる問題であるが、すでに別途論じた（岡部 2009； 2012b：30-58 ページ）

のでここでは繰り返さない。

この約 30 年をみると、人間生活の多くの側面において市場取引が浸透し、従来カネで売買されることがなかった多くのことが平気で売買されるようになっている（例えば二酸化炭素排出権、公共施設の命名権、臓器の売買など）。こうした市場主義の行き過ぎ（market triumphalism）は、人間社会を成立させる倫理を危うくさせ、社会を腐敗させる懸念が大きくなっている（Sandel 2012）。人間社会においては、本来カネで買えないもの（売買されるべきではないもの）があるはずである（同）。しかし、こうした市場取引が社会の多面に亘って浸透してきている現象についても、経済学者の大半はもっぱら効率性を中心とする議論で終始する傾向がある。こうしたことを考えると、現代経済学と経済学者は、ともすれば検討課題を処理しやすい視点から小さく捉える（Besley 2013）という安易な方向に傾きがちとなっているように思われる。人間とその行動を深く洞察するという当初の経済学の精神からみると、現代経済学はかなり堕落した面がある、というと誇張に過ぎるだろうか[9]。

西川（2011）の議論

以上では扱わなかったが、本稿は個人とその社会関連性を重要な視点としているため、その点で一つの重要な考え方を提示している経済学者の西川潤による『グローバル化を超えて―脱成長期　日本の選択―』(2011）の視点をここで導入し、簡単に紹介しておきたい。

それは、脱成長期の日本は今後どのような取り組みをすべきか（環境問題重視の必要性等）を論じたものである（その内容の記述は省略する）が、そこで注目すべきは、そうした近未来の社会は「個人の生活の自律性確立に始まって自分の内なる可能性を引き出す人間発展」によって達成すべきだ、としている点である。すなわち、目標は新しい社会（著者は共生社会と呼ぶ）であり、その達成手段として個人の人間的成長を位置づけている。これは前掲図表２のケース２のような主張であるということができる。すなわち、人間社会における目標と手段は、前掲した橘木（2013）の場合とちょうど逆の関係にあると理解できる。

---

[9] 例えば、人間にとっての幸せは、単に得ることだけでなく 3 種類ないし 3 段階ある（もらう幸せ、できる幸せ、あげる幸せ）という後述する考え方（高橋 2008：116 ページ）は、現代経済学では完全に排除されてしまっている。

辻（2008）および高橋（2011c）の議論

では、前述した辻（2008）および高橋（2011c）は、こうした観点からみるとどう性格づけられるだろうか。まず辻（2008）では、不幸せになった個人が再び幸せになることを最重視する立場であるから、個人の幸せが最も重要な目標になっている。そしてそれを達成するには、前述したとおり人々がたっぷりとした時間を持つための運動（文化変革運動）を起こすべきであり、その結果として個人の幸せが実現される、としている。このため図表２のケース３のような主張だと整理できる。ただし、重点は左側の「個人の幸せ」にある。

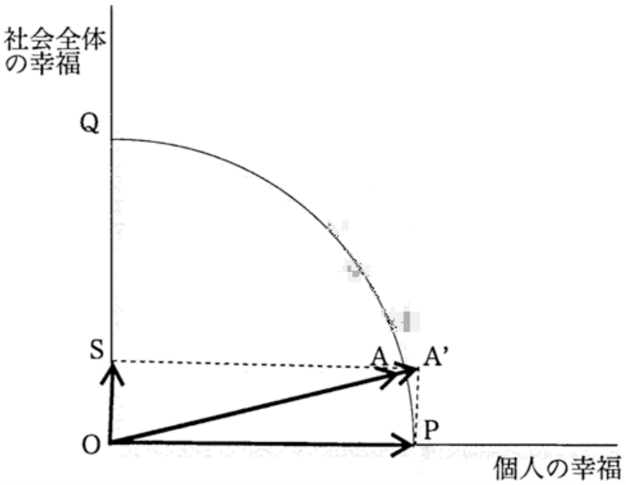
一方、高橋（2011c）の思想は、個人の幸せと社会問題（第三の国難）解決を同時に追求しようとするものであり、したがって図表２のケース３で示したようにこの二つがともに目標になる点で辻（2008）と共通している。しかし、辻（2008）の場合とは異なり、この二目標に同程度の重要性が置かれているうえ、両者の達成は一体的かつ同時進行する性格のものとして捉えられている。この点に大きな特徴がある。したがって、その主張は、いわばミクロ（個人の自己変革）とマクロ（社会変革）を統合した思想である、ということができよう。なぜこうしたことが可能になるのか。その詳細と具体例は３節でやや詳しく述べる。

（3）個人の幸せと社会の関わり（その２）

以上、幸せの本来的な「個人性」に加え、その「社会性」をも考慮するという枠組みを用いてそれぞれの立場を位置づけた。ここでは、図表を用いることによって上記の性格付けが一層明確になることを示すことにしたい。

図表３は、横軸に個人の幸福（個人性）、縦軸に社会全体の幸福（社会性）をとって幸せに関する各種思想の性格づける一つの図解的枠組みである。ここで個人性とは、個人が個人の幸せを追求する程度を示す。また社会性とは、社会全体に着目し社会がより良い方向（各種の社会問題の解決が進む、より効率的で公平かつ安定した制度になる、より平和になる等）に向けて追求される程度を示す。たとえば、ある思想が個人性（個人の幸福追求）だけに関わるときには、その思想をベクトル OP で表す。

図表３　個人の幸せと社会全体の幸せの関連：思想その１



同様に、別の思想が個人性ではなく社会性だけに関わるとき（例えばマクロ経済政策のように間接的にはともかく個人の幸福を直接意識しない場合）には、それをベクトル OQ で表す（その図示は省略してある）。

そしてそれぞれの思想が、これら両方を追求しようとする場合には、概念的には、一方に重点をおけば他方はその分だけ重点の置き方が軽くならざるをえないという関係（トレードオフ関係）を想定することができる。なぜなら、個人であれ社会であれ一時点で利用可能な人的ないし組織的なエネルギーの総量は一定の限界があると理解できるからである。このため、個人性（個人の幸福追求）にだけ関わるのではなく、多少とも社会性にも関わる思想は点 P の北西方向に位置する点として表すことができる。このように考えると、個人性と社会性の両方を考慮する思想は点 P と点 Q を結ぶ曲線上の一つの点（ここでは四分円弧 PQ で示しており[10]、これを幸福フロンティア曲線と称してもよかろう）として示すことができる。以上の枠組みを用いて上述した各種思想を位置づけ、その特徴を理解してみよう。

（4）個人の幸せとその社会関連性からみた各思想の位置づけ

まず橘木（2013）は、純粋に個人の視点からの議論である（個人が幸せを追求することの社会的含意は議論されていない）ので、その思想としての強さは上掲図表３に

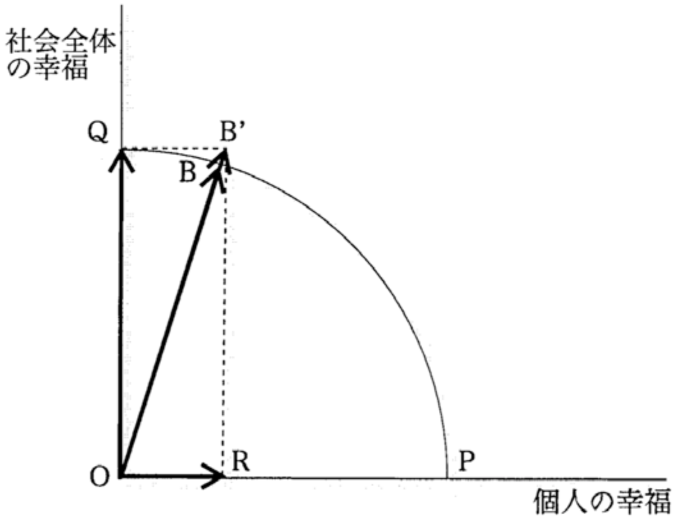
[10] 一般的にいえば、曲線 PQ は原点からみて東北方向に凸の形状をしていればどのような曲線でもよいが、ここでは便宜上、一般性を失うことがないので四分円弧とした。

おいてベクトル *OP* で示すことができる。その対極にあるのがマクロ公共政策（たとえば財政政策、金融政策などのマクロ経済政策）であり、そこでの視点は直接個人の幸せを左右する視点でなく社会全体の動向を左右することに置かれているため、ベクトル *OQ*（同様に図示できるがこの図では記載していない）で示すことができる。

次に、個人性と社会性の両方を考慮する思想である辻（2008）と西川（2011）はどう表されるであろうか。まず辻（2008）は、社会への働きかけ（文化革新運動）の主張を含む点で社会性も帯びているが、究極的には個人の幸せに関する思想である。このため、その思想は、ベクトル *OP* とベクトル *OS* の二つの性格を持つ、と理解できる（上掲図表３）。

したがって、数学的にはこの二つのベクトルの合成であるベクトル *OA'* でこの思想を表せるように一見思われるが、実はそうでない。なぜなら、上述したとおり、人間が発揮できるエネルギーには一定の限界があり、それは個人に残されたエネルギーと分散されて社会エネルギーとなった分の合計として理解する必要があるからである。つまり、ベクトル *OA'* は四分円弧 *PQ* を越えるので実現可能ではなく、その一部分（ベクトル *OA*。点 A は四分円弧 *PQ* 上に位置する）だけが実現可能となる。したがって、辻（2008）の思想は（ベクトル *OA'* によってではなく）ベクトル *OA* で示される。

図表４　個人の幸せと社会全体の幸せの関連：思想その２



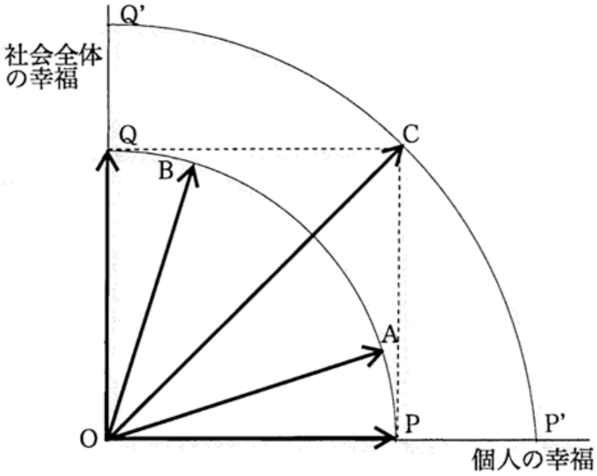
同様に考えると、西川（2011）は、個人の発展によって新しい社会（共生社会）を

目指す考え方であるから、図表４においてベクトル *OQ* とベクトル *OR* の二つの性格を持つと理解でき、結論的に（ベクトル *OB*' によってではなく）ベクトル *OB*（点 B は四分円弧 *PQ* 上に位置する）で表すことができる。

一方、高橋（2011c）は、個人の幸せと社会問題の解決を一体的かつ同時に実現可能だとする思想であるから、図表５においてベクトル *OP* とベクトル *OQ* の二つの性格を持つと理解できる。そしてその二つのベクトルを合成するとベクトル *OC* となるが、このベクトルは上記二つの思想と異なる性質を持っている[11]。すなわち、上記二つの場合にはこうした合成ベクトル（前記のベクトル *OA*'、ベクトル *OB*'）が達成不可能領域に位置していたが、高橋の場合にはそれが達成可能領域に位置することになるからである。なぜなら、高橋の場合には、当初の幸福フロンティア曲線（四分円弧 *PQ*) 自体が東北方向にシフトし、四分円弧 *P' Q'*になると理解できるからである。

これを示す図表５から明らかなように、高橋の説く思想は、個人にとっても社会にとってもその他二つの思想を優越する「強さ」を持つということができ、このため前二つの思想とは異なるパラダイムを展開しているということができるのではなかろうか。では、なぜ、それが可能になるのか。その理由を高橋（2011c）ならびにその関連書物に基いて著者なりに整理すると次のようになる。

図表５　幸せに関する幾つかの思想の対比



[11] 以上をまとめると、本稿で扱ったとおり思想には基本的に５つの型があり、それらの間には次のような差異があると理解できる。すなわち、ベクトル *OP* はミクロ的幸福の追求（主流派経済理論が前提にする社会認識）、そしてベクトル *OQ* は社会を変革する各種マクロ公共政策であり、このふたつが対極的な位置にある。そしてその中間に３つの思想、すなわちベクトル *OA*（草の根社会運動によって個人の幸せを達成する考え方）、ベクトル *OB*（個人の成長によって社会の変革を実現する考え方）、ベクトル *OC*（個人の幸せと社会問題の解決を一体的に実現する考え方）がある。

高橋の説き方に強さが見られる理由

高橋（2011c）の説き方に強さがみられるのは、第一に、人間が潜在的に持つエネルギーは非常に大きいと認識されているからである（人間の潜在力に関する認識の差異）。そうした潜在力は人間の本心に源をもつエネルギー（知恵と意思）であり、具体的には各個人の人生におけるミッション（職業や仕事あるいは与えられた環境で本来的にその任務に尽力すべきことがら）にそれが現れるとされる。また個人がそうしたミッション（使命）を自覚すれば、それは「与える喜び」という深い喜びをもたらすため、人間にはこの点からも本源的に大きな力を秘めていると説いている[12]。したがって、そうした人間の潜在力が顕現するならば、それは個人と社会の双方に対して当然大きな影響を持つことになる、と理解できる。

第二に、人間が潜在的に持つエネルギーは上記のように非常に大きいにもかかわらず、ほとんどの人は各種の制約によってその本来的な力の発現を封じてしまったり、あるいはその力を自己顕示など実り少ない用途に向けてしまったりしているので、そうした制約の存在を自覚しそれを取り除くことができれば、これまで経験したことのない大きな力が顕現化する[13]、とみているからである（制約除去による人間力発現の可能性）。実は、各人が無意識のうちに抱えているそうした制約を発見し、そこから自由になることこそ新しい生き方である、というのが高橋（2011c）の基本的主張であり、またその具体的方法の提示でもある（後者は次の３節で述べる）。

第三に、個人（自分）の行動が変わればそれは周囲にいる人間の行動も変えてゆくので、個人の変化は単にそれだけにとどまらず周囲ないし社会を変革する大きな力として作用すると考えられているからである（自己変革の周囲への波及性）[14]。そして自分の行動によって周囲が望ましい方向に変化すれば、個人はその生き方に確信を深め、その結果さらに大きなエネルギーを出すことができるようになる。こうした好循環が作動することが予想されていることも見逃せない点である。

第四に、社会がより良いものになる（例えば制度が個人の力量を発揮しやすいものに改善される）ならば、その結果として（図表２のケース３のように）個人の幸せ度

---

[12] 高橋（2011c：235-240 ページ）。
[13] 高橋（2011c：234 ページ）。
[14] この点を含め、高橋が基本に据えているのは「因縁果報」という知恵（高橋 2011c:149-160 ページ）にある。すなわち、「因」は直接的な原因（自分自身の行動）、「縁」は間接的な原因ないし条件（同志、原則、システム）、そして「果報」は結果という理解であり、このため因の変革が社会の変革に結びつくことになる。

合いも自ずから高まるからである（個人と社会の相互依存性)。

以上が、高橋（2011c）による言説が強さを持つ理由だと整理できよう。また、個人がその主張に沿った生き方をしようとする場合、高橋（2011c）はそのための実践的な指針を提示していることも特徴であり、強みにもなっている。その思想と実践結果に具体的イメージをあたえるため、ここでは個人の考え方とその行動の変化（自己変革）が周囲を大きく変えることによって社会性を持つ一つの問題の解決につながった例を一つ引用しておくことにしよう（高橋 2011c：4 章)。

それは、ある経営者の場合であり、彼は京都にある老舗の八代目社長であった。この社長は従来、業績を上げない社員は許せない、経営上重荷になった不採算部門は切り捨てる必要がある、会社の暖簾を守るためには社員の給与カットをするしかない、などとする発想を当然のこととして経営に当たっていた。しかし、心の鍛錬の結果、そうした考えは実は無意識のうちに自分に流れ込み自分を束縛していた考え方（暖簾を守るという縛られた意識）によるものであることに気づくこととなった。その後、社長は「私が変わる」（自己変革）を基本とする一方、ユーザーが本当に満足できる製品の開発を重視する、社員は道具でなく同志とみる、など従来の自分の「内なる限界」（暖簾を守ることへの執着）を突破する努力を重ねた。その結果、同社は「第二の創業」を果たし、社員が輝く会社になり、そして利益も向上した、という実例が紹介されている。

上記の具体例は経営者の場合であるが、同書（高橋 2011c）ではそれ以外にも多様なケースが紹介されている。例えば、人を守ることを深く納得して活躍する警察官、本心から社員に関わることによって会社のあり方を一変させた経営者、自分のためでなく人を支えたいという本心から６０歳で資格をとって活躍する税理士、患者や周囲の人のためになることを思い続けたことによって脊椎手術に画期的手法を見出した医師、などのケースである。それらの実例は、この思想に「時代の限界を突破する力」（同書の副題）があることを示しており、そうした動きの広がりが「第三の国難」に遭遇している日本を救う道になる、と同書は主張している。

３．高橋(2011c)の思想の先端性とその概略

本節では、上記のような成果をもたらしつつある高橋の思想をより具体的にみることとしたい。まず、その思想はこれまでに社会科学者によって展開された到達点を越

える性格を持つことを一つの例によって示す。次いで、その思想ならびに実践方法の要点を簡単に解説し、最後に筆者の若干の感想を述べることとしたい。なお、以下の記述は、高橋（2011c）をはじめとするその著作を筆者なりに咀嚼し、表現したものであり、極度の単純化ないし誤解が含まれている可能性がある可能性がある。このため、詳細は原典（本稿末尾に記載した高橋による一連の書籍）を参照されたい。

(1)思想の先端性[15]

高橋（2011c）の思想を位置づける手がかりとして、前述した西川（2011）を再び取り上げよう。

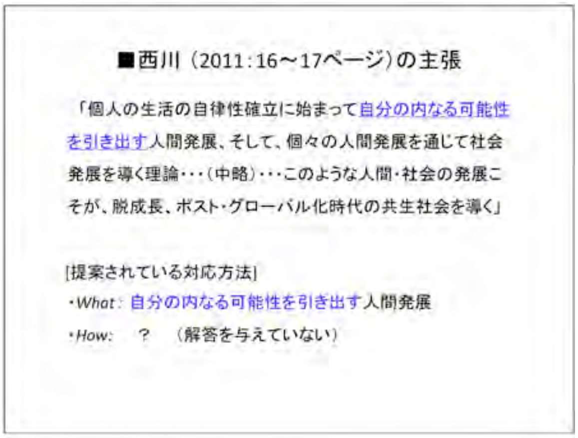
この書物（西川 2011）は、従来の経済学の問題点を多面的に批判するとともに、脱成長期の日本はどのような取り組みをすべきかを論じたものである。その結論として次のことが述べられている（図表６）。すなわち「個人の生活の自律性確立に始まって、自分の内なる可能性を引き出す人間発展、そして、個々の人間発展を通じて社会発展を導く理論・・・(中略)・・・このような人間・社会の発展こそが、脱成長、ポスト・グローバル化時代の共生社会を導く」と。これが書物全体の大きな結論である。すなわち、西川が提案する現代社会への対応方法、それは何か（What）と言えばそれは「自分の内なる可能性を引き出す人間発展だ(内発的発展の理論)」(西川 2011:377 ページ)という主張である。これは確かにたいへん魅力的な視点である。ただ、どのようにして（How）われわれが自分の内なる可能性を引き出すのか？　これについては、残念ながら何も言及されていない。

この問題を正面から取り上げ、そしてその手法に至るまで具体的に示したのが高橋の一連の著作（高橋 2002、2005、2008、2009、2011a、2011c）ということができる。それらや最近の論考[16]において高橋は概略次のように説いている（図表７）。すなわち「現代に生きるわれわれには三つの闇が侵入している。それは唯物主義（目に見えるものしか信じない）、刹那主義（今さえ良ければそれでよい）、利己主義（自分さえ良ければそれでよい）、の 3 つである。その結果、われわれは一見現実的、効率的な生活をしており、独立心に満ちている」と現状をまず分析している。そして、そのような状況は落ち着きがなく、心から満たされた状態にないので、それは個人にとっても

15 以下は岡部（2012b：68-72 ページ）に基づく。
16 月刊誌『GLA』2012 年 1 月号、16-17 ページ。

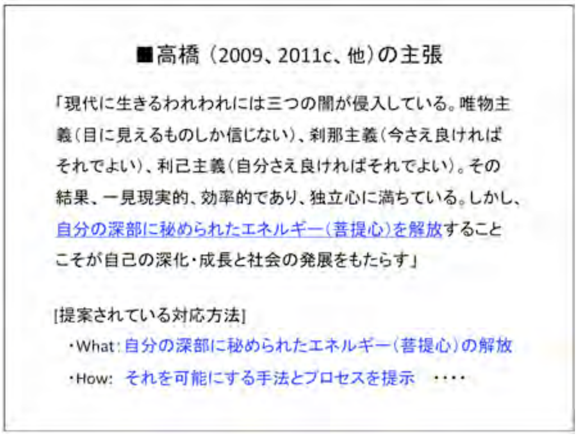
社会にとっても本来的なものではなく「自分の心の深奥に秘められた人間の根源的なエネルギーを解放することが必要であり、それによってはじめて自己の深化・成長そして社会の発展がもたらされる」という理解である。

図表６　個人の力を基礎とする社会改革：その１



（出所）岡部（2012b）資料 48。

図表７　個人の力を基礎とする社会改革：その２



（出所）岡部（2012b）資料 49。

つまり何を（What）に対しては、「自分の深部に秘められたエネルギー（菩提心）の解放だ」と答えている。これは、西川の主張する「自分の内なる可能性を引き出す」ことと基本的に同じものである。つまり、この 2 人の論者とも「自分の内なるエネルギーないし可能性の解放」を主張しており、それが個々人の人間的な成長だけでなく社会の発展をもたらす、と説いている点では共通している。

しかし、注目すべき点は、高橋の場合、西川の場合とは異なり、「自分の内なるエネルギーないし可能性の解放」を可能にする手法とプロセスをきわめて具体的に提示していることである。これが高橋の大きな特徴であり、その内容は非常に興味深く、そして先端性を示すものといえる。

(2) 自己変革の方法

出発点となる自己変革は、どのような方法によるのか、そしてそれがどのようにして社会変革（社会にとって望ましい帰結ないし問題解決）をもたらすのか。その大まかなステップを本項および次項で簡単に紹介しよう（図表８）。

まず自己変革を実現するためには順序があるとされ、それが明確に提示されている。

すなわち（1）事態に対する自分の一般的対応傾向（反応の回路）を知る。(2）その傾向から脱却する道を修行（心の鍛錬）と努力によって習得する。(3）心の奥深くから出てくる微かな呼びかけ（英語でいえば calling。日本語では責務、天職、人生の仕事など生き方を支える揺るぎない中心軸）を自分の心の中から聴く。(4）その声に従った行動をすることによって大きなエネルギーが自分の内側から汲み出される。(5）その結果、心の平安と自信が得られ、人間としての深化・成長が図られるとともに、社会性のある問題の解決ないし社会の調和が生み出される。これがそのあら筋である。それぞれの段階を個人がどう取り組んで行けばよいのか。それに関しては、詳細な行動上の処方箋が提示されている。

図表８　高橋（2011c）による個人の幸せと社会改革の同時達成

■高橋（2009、2011c）が提示する行動の
大まかなステップ

(1)事態に対する自分の一般的対応傾向（反応の回路）を知る。
(2)その傾向から脱却する道を修行と努力によって習得する。
(3)心の奥深くから出てくる微かな呼びかけ（英語ではcalling。召命、天職、人生の仕事など生き方を支える揺るぎない中心軸）を聴く。
(4)その声に従った行動をすることにより大きなエネルギーが自分の内から汲み出される。
(5)心の平安、自信が得られ、人間としての深化・成長、そして社会の調和が生み出される。

（出所）岡部（2012b）資料 50。

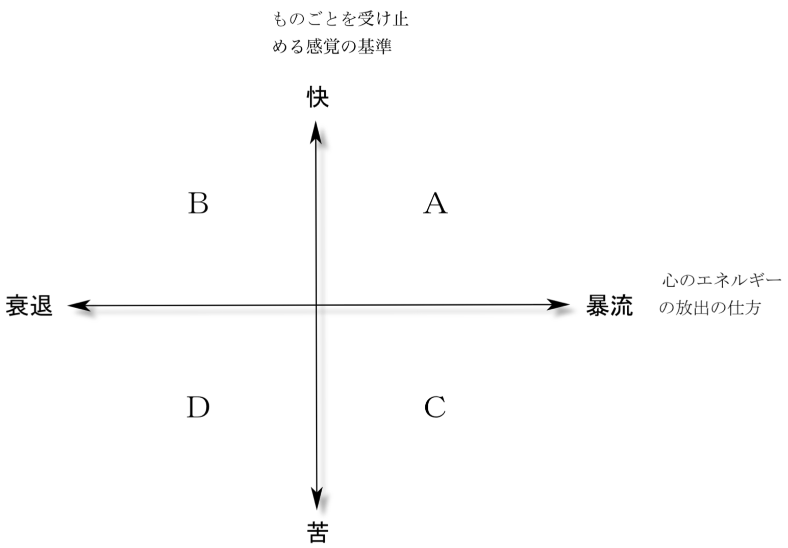
人間にあらわれる４つの類型

まず、出発点である自分自身の理解（上記（1)）に関しては、二つの独立した座標軸を導入することによってなされうる、と説いている（図表９）。すなわち、人間がものごとを受け止める感覚の基準として「快か、苦か」（肯定的に捉えるか、否定的に捉えるか）という一つ座標軸を設ける一方、心のエネルギーの放出の仕方として「暴流か、衰退か」（激しい流出か、勢いの喪失か）という別の区分を設定している。そして、人間に現れる考え方と行動は、誰の場合でもこの二つの座標軸を組み合わせることによって出来上がる４種類のうちいずれかの傾向を持つ、という理解の仕方を提示している。

個人が上記４つのいずれのタイプの人間であるかが診断されれば（その診断方法も

提示されているがここでは省略[17]、心を鍛錬することによってそうした傾向を消すことができる一方、それぞれのタイプが持つ本来的な力が現れてくる、と論じている。その核心部分を簡単にまとめると図表 10 のようになり、その一面をやや具体化すると図表 11 のようになる。

図表９　人間の思考および行動における４つのタイプ



A＝快・暴流、B＝快・衰退、C＝苦・暴流、D＝苦・衰退

（資料）高橋（2008：183 ページ、 2009：101 ページ）に多少追加記載。
（出所）岡部（2012a）図４。

４つの類型それぞれの特徴と秘める力

まず、前掲図表９におけるタイプＡ（快・暴流）の場合、それは「独りよがりの自信家」と性格付けられるとしている。つまり、このタイプは、無意識のうちに物事を自分に都合良く受け取り、自分の言う通りにせよという行動を周囲に対してとりがちである。その結果、周囲から人が離れて行き、孤立する傾向がある、としている。しかし、そうした傾向を持つ人が心の鍛錬（物事の受け止め方や行動を歪みのないものにする努力）をすれば、そうしたマイナス面が消える一方、そのタイプの人に特有の本来的な長所が現れる、と説いている。すなわち、このタイプは本来、明るさ、元気さ、エネルギーを抱いているので、場を飛躍させ、新しいものを創造し、道を切り開いて行く力を発揮することになる、としている。ところが現実には、このタイプの人

[17] 例えば高橋（2009：218-221 ページ）を参照。

を含め人間は、それら各種エネルギーを発現することが諸事情[18]から妨げられていることが強調される。このため、心の鍛錬をしてそれを解放することが重要であるとされている。

図表１０　人間の考え方や行動に現れる特徴と心の鍛錬後に拓かれる可能性：４つの型

人間に現れる基本的な型	事態の受け止め方や行動の傾向、その帰結	心の鍛錬後に現れる本来的な力
A（独りよがりの自信家）	・無意識のうちに物事を自分に都合良く受け取り、自分の言う通りにせよという行動。 ・周囲から人が離れて行き、孤立する傾向。	・本来、明るさ、元気さ、エネルギーを抱いているので、場を飛躍させ、新しいものを創造し、道を切り開いて行く力を発揮。
B（自己満足の幸福者）	・いま問題がなければよい、いま楽しければよいと受け取り、事態を曖昧に放置。 ・物事や事態が停滞あるいは混乱する傾向。	・本来、やさしさ、包容力、融和力を抱いているので、ねじれた関係を修復し、人々を癒し、安定した状態を導く力を発揮。
C（恨みの強い被害者）	・何事に対しても不足や欠点に目が向いて不満を抱き、それを正す正論を頑固に主張。 ・事態や相手を頑なに拒絶するので人間関係が硬直的、破壊的になる傾向。	・本来、責任感、強さ、勇気を抱いているので、大勢に流されずに弁別し、正義のために自分を超えて場や人々を守る力を発揮。
D（諦めに縛られた卑下者）	・自分にはとても無理と否定的に受け止め、卑屈になり、愚痴をいうので鈍重な雰囲気を醸成。 ・周囲や事態が沈鬱化し、衰弱する傾向。	・本来、誠実さ、まじめさ、愚直さを抱いているので、他人の悲しみに共感し、ひたむきさや献身によって周囲を支える力を発揮。

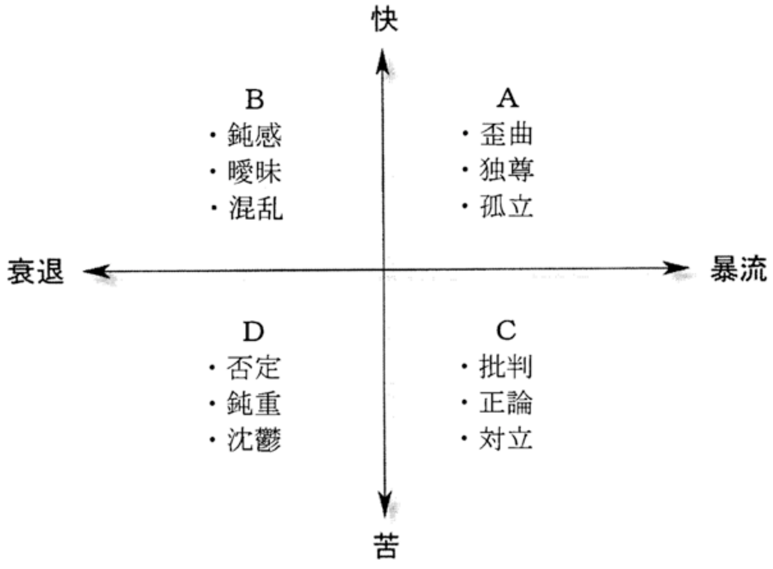
（注）高橋（2002：91‒121 ページ；2005：98‒115 ページ）をもとに筆者作成。

タイプ B（快・衰退）の場合は、「自己満足の幸福者」と表現でき「いま問題がなければよい、いま楽しければよい」と受け取り、事態を曖昧に放置する傾向があるの

[18] 第一に、両親（血）を通してわれわれに流れ込む考え方・価値観・善悪感・感情の起伏、第二に、生まれ育った地域（地）の風土や風習・習慣などから身についた価値観や行動パターン、第三に、特定の時代における知識・情報・価値観（知）から流れ込む知識や思想・価値観など。この３要因（血・地・知）を高橋は「３つの『ち』」と称している（高橋 2011c：143‒146 ページ）。

で、その結果、物事や事態が停滞あるいは混乱する結果をもたらす、としている。しかし、心の鍛錬をすれば、そうした消極的かつ楽観的な面が消える一方、本来的な長所であるやさしさ、包容力、融和力が現れ、その結果、ねじれた関係を修復し、人々を癒し、安定した状態を導く力を発揮できることになる、としている。

図表１１　４つのタイプそれぞれの受け止め方と行動のパターン



（注）高橋（2005：98–115 ページ）をもとに筆者作成。

タイプ C（苦・暴流）の場合は、「恨みの強い被害者」であり、何事に対しても不足や欠点に目が向いて不満を抱き、それを正す正論を頑固に主張する傾向が強いと指摘、このため、事態や相手を頑なに拒絶するので人間関係が硬直的、破壊的になる事態をもたらす、としている。この場合、心の鍛錬をすることによって、このタイプが本来持っている責任感、強さ、勇気が表に出てくるため、大勢に流されずに弁別し、正義のために自分を超えて場や人々を守る力を発揮できる、としている。

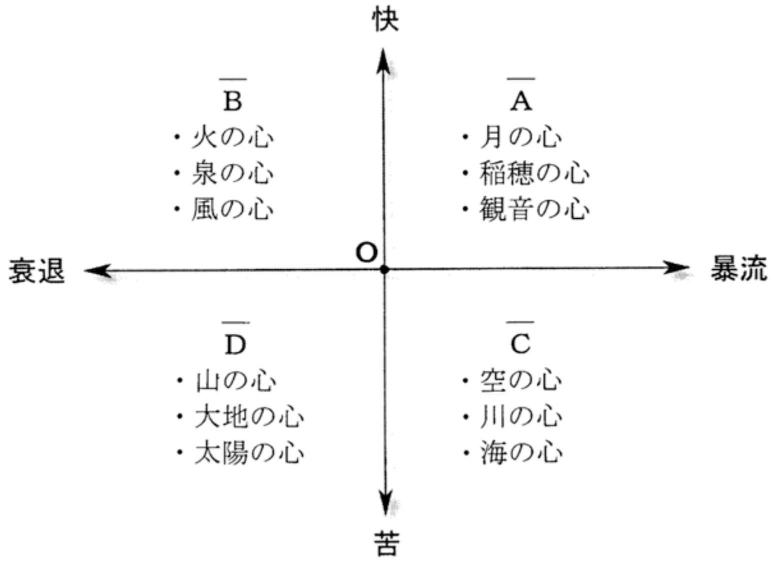
最後のタイプ D（苦・衰退）の場合、その人は「諦めに縛られた卑下者」であり、多くの場合、自分にはとても無理と否定的に受け止め、卑屈になり、そして愚痴をいう傾向が強いので周囲に鈍重な雰囲気を醸成する傾向が強い、とされる。このため、周囲や事態を沈鬱にしてしまう結果をもたらす、としている。この場合、心の鍛錬をすれば、このタイプが本来的に持つ誠実さ、まじめさ、愚直さが現れることになり、その結果、他人の悲しみに共感し、ひたむきさや献身によって周囲を支える力を発揮

することになる、としている。

４つの類型それぞれに秘められた力を引き出す方法

では、上記でカギになる心の鍛錬はどのようにすれば可能になるのか。その方法は確かに存在し、それは要約すると図表 12 のようなものになる、と提案している。すなわち、タイプＡ（快・暴流）に該当する人の場合には、陰徳の心、感謝の心、慈悲の心を自分の心の奥深くに見つける鍛錬（修行）をするべきであると説いており、そしてこれら３つの心は、比喩的にいえばそれぞれ月の心、稲穂の心、観音の心に該当する、と述べている。例えば、月の心は「隣人をひそやかに陰で支えることができる陰徳の心」であるとしている。なぜこのように自然の心に例えるのか。その理由は、これらの心はわれわれ日本人が古来より心を寄せて親しみ、生き方をも学んできた自然の姿であり、人間の心のあり方として自然界の名称をつけるのがふさわしいとされているからだ、と説明している[19]。

図表１２　４つのタイプそれぞれが育むべき心



（注）高橋（2008）187 ページ。

同様に、タイプ B（快・衰退）の人の場合は、熱き心（火の心）、知恵の心（泉の心）、無垢な心（風の心）の発掘が奨励される。そしてタイプ C（苦・暴流）の人の場合には、自由な心（空の心）、清らかな心（川の心）、知恵の心（泉の心）の涵養が

[19] 高橋（2008：６ページ）。

勧められている。最後のタイプ D（苦・衰退）の場合は、不動の心（山の心）、親の心（大地の心）、愛の心（太陽の心）を自らの中に発掘すべきであると述べている。これら合計 12 の心は人間にとって最も普遍性の高い価値を表すものであるとされている。それらの詳細は高橋（2008）に詳しい説明があり、またそれを涵養する方法（いずれの方法も努力と継続が肝要とされる）は一連の著作（高橋 2008 ほか）で解説されているのでここでは省略する。

実は、それぞれのタイプごとに涵養すべき心のあり方を図表 12 のように整理をすることによって、きわめて興味深い点が浮き上がっている。それらは、前掲図表 11 で示された４つのタイプそれぞれが持つ心の傾向を解消する方法になっているだけでなく、そうした対応をする結果として、各タイプの長所が浮かび上がるかたちになっているからである。

例えば、タイプ A（快・暴流）の場合、その特徴は「歪曲、独尊、孤立」といった傾向であるが、その人が「月の心、稲穂の心、観音の心」（すなわち陰徳の心、感謝の心、慈悲の心）といったいわば対極に位置する心を育むならば、タイプ A に特徴的な力（図表 10 の右欄で示した明るさ、元気さ、エネルギー）が自分のためでなく社会のために、そして創造的な方向に働くようになることが示されている。このことを形式的に表現するならば、下記のようになろう。すなわち、タイプ A として特徴的な傾向（A）を持つ人が、それを解消して本来的なエネルギーを発現するための心の鍛錬（$\overline{A}$）をする場合には、次のような帰結が得られると理解できる。

$$A + \overline{A} = 0$$

すなわち、タイプ A の人は、潜在的に上記の特徴的な力を持つものの、従来は各種の束縛（宿命、A）によりそれが発揮されずにいた（その分だけ力量がマイナスになっていた）。しかし、心の鍛錬（$\overline{A}$）をすれば、そうした状況から解放され、その時々の状況や感情に左右されない受け止め方や行動が可能になること、換言すればマイナスが消えてその人が本来秘めている力が湧き出てくることが示されている（その意味で上式では鍛錬後には０になると表現）。また図表 12 によって理解するならば、これは両軸が交差する原点Ｏと表示した地点に到達することを意味するものである。このことは、タイプ A の人のほか、タイプＢ、タイプＣ、タイプＤの場合も同様である。

こうした見方は、両極端を排して不偏の道を歩むこと（正しい生活をすること）を説いているということができ、仏教の基本思想のひとつである「中道」の心[20]を推奨するものと理解できる。それはまた、経済学の始祖とされるアダム・スミスが人間について説いた最も重要な側面の一つ（しかしその後の経済学が振り落としてしまった側面）に通じるものがある。すなわち人間は、自分の感情や行為が適切かどうかを測る基準として、利害関心のない「公平な観察者」（impartial spectator）を自己の中に形成するものであり、そうした観察者が是認するような感情や行動を採る（例えば義務の感覚に従う）ことによって平静な心が保てるので、その結果として個人の行動が制御され、社会の秩序も維持される、という理解である（堂目 2008：第1章)。

つまり人間は、両極端に走らない考えや行動、換言すれば平静な心が維持できるような考えや行動を採ることを常に目指すことよって、個人の「幸せ」と社会の秩序がもたらされるというのが一般的な原理であり、それは洋の東西を問わず認識されてきたことだといえる。したがって、高橋の主張する人間行動の４類型とその対応方法は、達観すればこうした思想潮流に合致する普遍性の高いものである、といえるのではなかろうか。

(3)自己変革の社会的帰結

こうして四つそれぞれのタイプの人が持つ強いエネルギーが開放され、生産的な方向に向けられるならば、それは何を意味するのか。先ずそれは、個人として自由ですがすがしく、エネルギッシュで忍耐強く、慈しみと包容力に満ちて、謙虚さを失わない（これらは幸せを構成する諸要素といってよい）自分が現れてくる[21]だけでなく、社会全体としていろいろな問題を解決してゆく大きな力になることが強調されている。

なぜなら、社会は千差万別の任務、仕事、働き、職業が連鎖することによって機能するものであるが、そうした機能を十全に発揮させることができるのは究極的にはそれぞれの場に関わる個人であり、したがって個人の考え方と行動が変わればそれは結局組織やひいては社会全体を変えてゆくことになる[22]からである。つまり人間は、表

[20] 中村（1981：960ページ)。
[21] 高橋（2008：７ページ)。
[22] 高橋（2011c：149-160ページ)。

面上４つのタイプがあるものの、それが克服されて内なる資質とエネルギーが現れ、それが外部（仕事や立場）からの要請に一致するところに各人が果たすべき個々人のミッション（人生の目的と使命）がある。それを具体化したものとして、一般に各人の仕事ないし職業が位置づけられる。したがって各人が自らのミッション（それは心の鍛錬を通じて発見する以外にない）に目覚めれば、その仕事や働きを通じて社会全体が大きく変わってゆくからである、と説いている[23]。

こうした見方は、「仕事」に対する洞察の深さを示しているように思われる。すなわち、欧米流（正統派経済学）の労働観を一言でいうと（付論１を参照)、「労働は苦痛なり」（それは生活の糧を得るためのものに過ぎず真の人生は労働の中になく余暇の中に見出される）というものであり、仕事に対して個人的価値を積極的に認めるわけではない。これに対して高橋は、仕事には個人的にも社会的にも大きな意義があることを前提しており、このため仕事を通じて個人および社会の双方が大きく変わって行くことを見通している。こうした仕事観は、仏教的な仕事観ということができる。なぜなら、仏教的観点からは仕事の役割は少なくとも三つあるとされるからである（付論１)。すなわち仕事は（1）人間にその能力を発揮向上させる場を与えること、(2）一つの仕事を他の人たちと共にすることを通して自己中心的な態度を捨てさせること、(3) そこそこの生活に必要な財とサービスを造り出すこと、とみられるからである。

上記のような個人の変化が社会的変化をもたらすという筋書きが現実に生じていることは、高橋の一連の著作において多くの事例が紹介されており、またその思想を学び、心の鍛錬をするセミナーなどの場においても詳細に報告されている[24]。そうしたケース・スタディによれば、この思想とその実践は多種多様な職業や立場の人々に広がっており、高橋の思想を実践した結果、「自分が変われば世界が変わる」「忙しいけれども元気、平穏でありながら充実している、問題と向かい合いながらも颯爽としている、現実に応えながら夢への挑戦をしている」といった生き方ができるようになったことが報告されている[25]。

---

[23] 高橋（2011c：235-240 ページ)。
[24] 高橋（2011c：235-237 ページ)。
[25] 高橋（2009：178-182 ページ)。

(4) 若干の感想

以上で概観した高橋の主張につき、若干の感想を述べておきたい。

第一に、そこには現代社会に対する深い洞察があるほか、その思想は体系的であり、かつ論理的にきわめて明快なことである（体系性、明快さ）。現代社会は唯物主義、刹那主義、利己主義という「時代の三毒」が支配するようになったという前述した指摘は、社会全体が市場化し、グローバル化したことの結末を鋭く見抜いているといえる。また、人間の考え方と行動の特徴を理解する場合、上述した二つの異質の側面を組み合わせて（4 つのタイプによって）理解しようとするアイデアは独創的であり、かつ論理的にも納得がゆく。

さらに高橋は、人間の幸せには「もらう幸せ、できる幸せ、あげる幸せ」の 3 段階があると主張、これらは概ね人間の成長度合いに対応しているという見方を提示しているが（高橋 2008 : 116 ページ）、これもたいへん新鮮であり、また興味深い。標準的な経済学においては、前述したとおり、人間は利己的かつ功利的な主体であることを前提とし（つまり「もらう幸せ」だけしか考慮せず）、それ以外の幸せは議論の対象としてこなかった。しかし人間は、利己的側面のほか、明らかに利他的側面も併せ持っている。このことは心理学をはじめ現代の各種社会科学の研究において広く知られることとなっている（Luks 1988）。また東日本大震災（2011 年 3 月 11 日）の直後、各種のボランティア活動（利他的行動）が活発化した現実に照らしても、その妥当性は明らかである。高橋の思想はこれらの点も包摂するものといえよう。高橋は、これらの源には「菩提心」と名付ける人間の心深くに潜む衝動のエネルギーがあると説いている。すなわち人間には、痛みには歓びを、混乱には調和を、停滞には活性を、破壊には創造を、求める心が潜んでいる（高橋 2009 : 124 ページ）と洞察しており、上記の現象はいずれもその延長上に位置づけられよう。

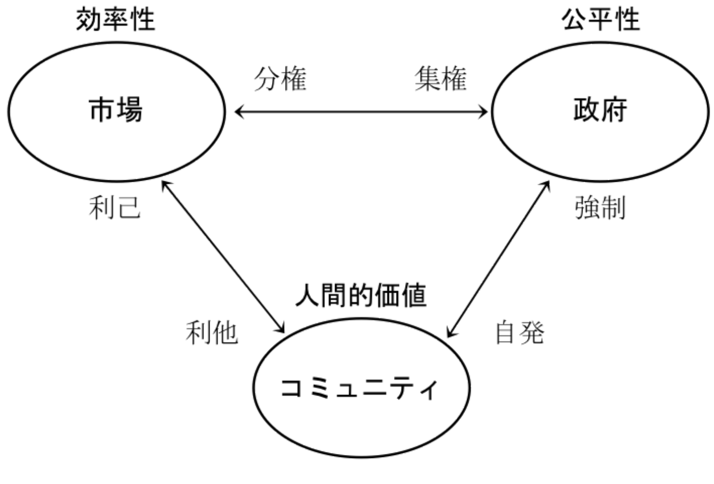
第二に、個人がまず変わることから出発するこの思想において、個人が自己変革をするための方法や手段がそれぞれのステップごとにきわめて具体的に示されていることである（実践性）。幸福思想ないし社会思想が提示される場合、たいていはその考え方の記述にとどまるが、高橋の場合、思想自体にとどまらずその具体的な実践方法も併せて提示されている点が類似思想にない大きな特徴になっている。

第三に、個人が新しい生き方を実践することによって個人の幸せが達成できるばかりでなく、個人の行動はその個人の周辺にいる人々の行動変化をもたらし、それをも

新しい起点として大小様々な社会的な問題が解決されてゆくという現実が非常に多く生まれていることである（実証性）。その結果、高橋が提示する思想の確かさが一段と高まっているようにうかがわれる。

一般的にいえば、社会問題を解決する場合、従来は民間主体が活躍する市場とその対極にある政府の二つの主体が想定されていた。すなわち、市場においては家計や企業が利己的、分権的に活動する一方、政府はそうした民間活動に伴う様々な問題に対処するために権限を集中保有し、強制力を持って問題を補正する、という理解である。ところが近年は、こうした二分法では捉えきれない人間の行動動機や人間活動あるいは人間集団の重要性が高まっており、このため政府でもなく市場でもない民間セクター、すなわち各種のコミュニティー（自立した個人のつながり）を明示的に位置づけて社会を理解する必要性が大きくなっている（図表 13）。こうしたコミュニティは従来の「民」（私）とも「官」とも異なる「公」であり、公共性を持つ新しいセクターである 。こうしたコミュニティの活動に対して人間は、利己的というよりも利他的な動機で、そして強制されてではなく自発的に関わることが多い点が特徴的である。

図表１３　社会問題解決にとっての新しいパラダイム



（注）岡部（2009）図表 3。

こうした枠組みで理解するならば、高橋の論説は、まず自分が変わることの必要性（自発性）を出発点としており、それが自分と周囲とのつながり（人間的価値）を通してコミュニティの問題、ひいては社会全体としての問題を解決してゆく道筋を説い

たもの、と理解できる。各種の新しい社会問題を解決するに際して、新しい発想や手法で対応することが「総合政策学」の基本理念である（大江・岡部・梅垣 2006）ので、高橋の主張は総合政策学の精神に合致するものであり、そこに一つの新しい次元を加えるものということができよう。

なお、ごく最近、秋山（2013）は日本の医療について詳細な実地調査を行い「一人一人の当事者が、自分なりの健康や幸せ（well-being）を実現しながら、結果としてコミュニティ自体も豊かになっていく営み」（秋山 2013：2 ページ。コミュニティヘルスと命名）が幅広く台頭していることを見出している。これは、高橋が提唱する思想、すなわち個人の考え方と行動の変革（個人の幸せの実現）とそれを基礎とした社会的課題の解決（より良い人間社会の実現）を一体的かつ同時に達成する思想、に一脈通じる面を持つ。このため、社会問題を解決するうえで高橋や秋山は新しい方向を示すものといえる。

４．結論

本稿の主要論点を要約すれば次のとおりである。

（1）幸せ（happiness）とは、一般的にいえば人が精神的ないし感情的に良好な状態（well-being）にあることを意味するが、その程度や態様は人により、また時により異なるやや曖昧な概念である。このため近年は、哲学や宗教など伝統的な領域からの考察に加え、生物学、心理学、脳科学、文化人類学、経済学など幅広い分野からその研究が活発化している。

（2）本稿では、幸せに関して最近日本で刊行された 3 冊の書物、すなわち経済学者による書物（橘木、2013）、文化人類学者による書物（辻、2008）、宗教思想家による書物（高橋、2011c）を取り上げ、それを手がかりとして幸せを考察した。その際、幸せを単に個人の視点からとらえるだけでなく、幸せと社会の関係も視点に加えて上記 3 冊を位置づけた。

（3）その結果、a）経済学の視点（橘木、2013）からみた幸せは伝統的に個人の幸せに限定されており、政府や社会など外部環境は個人の幸せを増進する役割を持つものとして位置づけられていること、b）文化人類学の視点（辻、2008）からみると経済的な豊かさ（所得や消費の増大）は幸せをもたらすのではなくその追求が逆に人々の

不幸せ（競争への脅迫、所得格差増大、地球温暖化等）をもたらしており、このため今後は従来の思考から抜け出して魂のあるつながり（コミュニティ等）を大切にすることによって本当の豊かさと幸せへの道が拓くべきとしていること、などが要点であった。一方、c）宗教思想家の視点に立つ高橋（2011c）においては、個人レベルの幸せ、社会としての幸せ（発展）の双方が同時に達成される新しい思想がその実践方法とともに提示されており、またそれが多くの実践事例（ケース・スタディ）によって確認されていることを明らかにした。

（4）高橋（2011c）の主張は、論理的に明快であるほか、ミクロ（個人の自己変革とその結果生まれるすがすがしい生き方）とマクロ（社会問題の解決）を統合した思想である点に斬新さがある。そこでは、人間がもつ内在的エネルギーは非常に大きいにもかかわらず、諸事情を反映してその発現が妨げられているという認識が基礎にある。このため、人間が物事の受け止め方や行動を変革するための心の鍛錬（物事の受け止め方や行動を歪みのないものにする努力）をすれば内なるエネルギーを開放することができ、それが個人のすがすがしい生き方（幸せ）をもたらす一方、個人が社会で置かれた状況（職業）を通じて社会も変革することになる、という主張である。このため、今後その思想が広まれば日本が抱える各種社会問題の解決に資する可能性がある。各種の新しい社会問題を解決するに際して、新しい発想や手法で対応することが総合政策学の基本理念であるので、高橋（2011c）の主張は総合政策学の精神に合致するものであり、そこに一つの新しい次元を加えるものということができよう。

以上

付論１　仏教経済学の提案

正統派経済学に対する批判は従来から少なくないが、比較的早い段階で強力な批判を加えたものとしてシューマッハー(1986)『スモール・イズ・ビューティフル―人間中心の経済学―』(原著 Schumacher 1973）がある。その書物では、経済学に対する従来の見方、すなわち経済学は絶対性・不変性の真理を持つ科学でありそれはあたかも

重力の法則のように妥当する（形而上学ないし価値と無縁である）という発想を厳しく糾弾するだけでなく、それに代わる一つの方向として仏教経済学が提案されている（第 1 部第 4 章「仏教経済学」69–81 ページ）。

シューマッハーが提案する仏教経済学

シューマッハーは、経済を構成する幾つかの重要な側面を取り上げ、現代経済学から見た場合と仏教経済学から見た場合を対比させることにより、前者が如何に特異な視点であるかを示す一方、後者が人間社会のあり方として妥当な見方を提供するかを述べ、仏教経済学が優れた社会認識の方法として成立するかをスケッチしている。それを簡単に要約すれば以下のようになる（付表 1 を参照）。

付表１　現代経済学と仏教経済学の対比

項目	現代経済学	仏教経済学
経済の基本視点	・消費が経済活動の唯一の目的であると位置づけ、その極大化を図ろうとする。 ・土地・労働・資本などの生産要素はその「手段」に過ぎない。	・適正規模の消費で人間としての満足（簡素、人間性の純化、圧迫感の最小化、つながり、非暴力など）を極大化するという視点。
労働	・雇い主の観点からすればそれは一つのコスト（可能な限り小さくしたいと考える）。 ・労働者の観点からいえば労働は非効用（働くことは余暇と楽しみを犠牲にすることであり賃金はその見返り）。	・仕事（労働）には３つの役割がある：(1)人間にその能力を発揮･向上させる場を与える、(2)一つの仕事を他の人たちと共にすることを通じて自己中心的な態度を棄てさせる、(3)ほどほどの生活に必要な財とサービスを作り出す。
再生可能な物質と再生不能な物質	・カネで表した価格によって全てのものを同一化・数量化する方法論をとるため、再生可能な物質と再生不能な物質の区別はない（石炭、石油、薪、水力など相互に代替可能な燃料はコストに差があるのみ）。	・再生不能な燃料（石炭、石油）と再生可能な燃料（薪、水力）の間には本質的な差異があり、前者を不用意かつ贅沢に使うのは一種の暴力行為。 ・再生不能の燃料資源は地理的分布が極めて偏っており、また総量にも限界があるから、それをどんどん掘り出すのは自然に対する暴力行為であり､人間同士の暴力沙汰にまで発展する。

（注）シューマッハー(1986：第 1 部 4 章)をもとに筆者作成。

まず、経済学の基本視点について、現代経済学（正統派経済学）では、消費が経済活動の唯一の目的であると位置づけ、その極大化を図ろうとするのが基本認識である。したがって土地・労働・資本などの生産要素はその「手段」とみなされる。これに対

して仏教的な観点からは、適正規模の消費により人間としての満足（簡素、人間性の純化、圧迫感の最小化、つながり、非暴力など）を極大化するという視点が基本となる。

次に労働を見る視点は、現代経済学では、雇い主の観点からすればそれは一つのコストである（したがって可能な限り小さくしたいと考える）一方、労働者の観点からいえば労働は非効用である、つまり働くことは余暇と楽しみを犠牲にすることでありその見返りに賃金を受取る、と捉えられる。これに対して仏教的な観点からは、仕事（労働）には少なくとも３つの役割があるという理解がなされる。すなわち仕事は(1)人間にその能力を発揮・向上させる場を与える、(2)一つの仕事を他の人たちと共にすることを通じて自己中心的な態度を棄てさせる、(3)まっとうな生活に必要な財とサービスを作り出す、というものになる。つまり、仕事と余暇は相互に補って生という一つの過程を作っており、二つを切り離してしまえば、仕事の喜びも余暇の楽しみもともに失われてしまう、というのが仏教的視点である。仕事を理解するには、この理解方法が真理を突いていると筆者には思われる。

さらなる例は、再生可能な物質と再生不能な物質についての理解の違いである。現代経済学では、カネで表した価格によって全てのものを同一化・数量化する方法論をとるため、再生可能な物質と再生不能な物質の区別はない。したがって石炭、石油、薪、水力など相互に代替可能な燃料はコストに差があるだけである。これに対して仏教的な観点からは、再生不能な燃料（石炭、石油）と再生可能な燃料（薪、水力）の間には本質的な差異があり、前者を不用意かつ贅沢に使うのは一種の暴力行為であると捉える。さらに再生不能の燃料資源は地理的分布が極めて偏っており、また総量にも限界があるから、それをどんどん掘り出すのは自然に対する暴力行為であり、さらにその結果人間同士の暴力沙汰にまで発展する、と考える。

仏教経済学では、消費はそれを最大化する視点に立たず、あくまでその適正規模を問題とするので、一見経済の停滞を示唆しているように受け取られかねない。しかし、問題は「近代的成長」をとるか「伝統的停滞」をとるかの選択ではなく、正しい経済成長の道（中道）すなわち正しい生活を見出すことである、とされる。

日本における仏教経済学

日本においても仏教経済学を提唱する論調が従来みられる。井上信一『地球を救う

経済学—仏教からの提言』(1994)はおそらくその嚆矢であり、それを拡張したものとして安原和雄『足るを知る経済—仏教思想で創る二十一世紀と日本』(2000)がある。

井上(1994)は、仏教経済学を特徴付けるものとして3つのスローガンを挙げている。すなわち（1）自利他利円満の経済学、（2）平和の経済学、（3）地球を救う経済学、である。そして、仏教経済学が従来の経済学と大きく違う部分がでてくるとすれば、それは「ありがたい」（生かされている事実への感謝、すばらしい）と「すまない」（これまで気づかずに宇宙のリズムに背いてきた懺悔）という二つの気づきの有無があることだ（130-131 ページ）と指摘、それが「少欲知足（しょうよくちそく）」すなわち欲望の抑制をもたらす、と主張している。

安原(2000)も、「まだ足りない、もっとほしい」という貪欲と執着の生き方の反省にたって「もうこれで十分」(われ、ただ足ることを知る）を基本とする経済思想への転換が必要であることを強調、それは仏教の知恵（足るを知る、共生、中道）にほかならないと主張している。そしてそれは国際的に広く受け入れられている「持続的発展」(sustainable development）の思想に密接につながっていると指摘、人類が到達した知恵といえる持続的発展を日本憲法の新理念として明記し、21 世紀の世界をリードすべきだとの議論にまで発展させている。現代経済学は貨幣的価値と数量化を重視するのに対して、仏教経済学は非貨幣的価値と質を重視すると対比させ(76 ページ)、後者の基本は「知足」(足るを知ること。分相応のところで満足すること）にあると強調している点は井上(1994)と同じである。なお、安原(2000)は、仏教経済学と称するよりも「知足の経済学」という呼称がより適切であるとしている（「仏教」という用語には「葬式仏教」など近年幾つかのマイナスのイメージがついて回るため)。

「足るを知る」の普遍性

上述した「足るを知る」という思想は、実は仏教にだけ見られるものでなく、人間にとって普遍性の高い一つの考え方と行動基準を示すものである。例えば、個人の自由が尊重されるアメリカ社会では、個人が何か（例えば商品）を選択する場合、選択肢が多ければ多いほどより良い選択ができ、従って満足度もより大きくなる、と常識的には考えられている。しかし、最近の心理学や行動科学などの研究結果によれば、選択肢は多ければ多いほど良いわけでないことが明らかにされている（Schwartz 2004）。選択できる商品等の数が多いほど消費者は満足度が大きくなり、より幸せで

あるというわけではないのである（一種のパラドックス）。

なぜ、そうなのか。それは、一言でいえば、選択肢が増えれば増えるほど選択主体にとって各種の心理的負担が大きくなり、満足度の上昇をもたらすわけでないからである。すなわち、選択肢が多くなれば、第一に、どれを選択するかについての意思決定に伴う負担（そのための時間、エネルギー、不安感）が増大するとともに、選択後には、正しい選択をしたと自分自身に言い聞かせる心理的負担（psychological distress）が発生するからである。第二に、選択肢の増加により、一層大きな満足が得られるという期待（過大期待）が生じるので、それが外れた場合には不必要な心理的落ち込みが生じるからである。そして第三に、不適切な選択をした場合には自己嫌悪や後悔により、不安やストレスが増大してしまうからである。

したがって、より多くの選択肢の中からベストの選択をすることを試みようとするよりも、比較的少ない選択肢のなかから「good enough」（もうこれで十分、これで結構）という選択をするほうが結果的に満足できることになる（精神的安定が得られる）というわけである。すなわち、より幸せになろうとすれば、最大限の満足を得ようとする行動をとるよりも、むしろ自分が現状で満足しているかどうかを基準に考えるべきであり、さらにいえば、意識的に感謝の心を持つようにすることが大切である（Schwartz 2004：229 ページ）とされている。これは最近の心理学等の研究結果であるが、上記の仏教思想に通じる点がきわめて興味深い。

なお、上述した仏教経済学ないし「知足の経済学」は、その前提の確かさとビジョンの豊かさ（“What”）に筆者は共感するところが多いが、そうした社会を個人の行動を基礎としてどのように作っていくか（“How”）についての検討（本稿が主題とする視点）はなされていないので、今後それが必要となろう。

付論２　主流派経済学が前提する個人主義的かつ功利主義的な幸せ

本文で述べた主流派経済学（ことにミクロ経済学）の議論と橘木（2013）の議論をやや厳密に展開すれば、以下のようになる。まず、経済学の標準理論においては、個人の幸せは満足度（効用）と等値され、それは（a）自分が享受できる財やサービスの量に依存する、(b) そうした財やサービスはすべてカネで買える、(c) そうした財

やサービスの量が多ければ多いほど満足度は上昇する、(d) ただし満足度の増え方は財やサービスの量が増えるに従って小さくなる(限界効用の逓減)、という前提が置かれる。これは個人主義と功利主義の考え方であり、これがすべての議論の出発点である。

この場合、ある個人の効用Uは、彼が保有するn個の財ないしサービスの量を説明変数とする下記の関数によって表わされる。

$$U = U(x_1, x_2, \cdots, x_n) \qquad (1)$$

そしてこの関数が上記の前提(c)および(d)を満たすことは、それぞれ下記(2)式および(3)式で表される性質を持つとして理解できる。

$$\frac{\partial U}{\partial x_j} > 0 \qquad j = 1, 2, \cdots, n \qquad (2)$$

$$\frac{\partial^2 U}{\partial x_j^2} < 0 \qquad j = 1, 2, \cdots, n \qquad (3)$$

さらに、より一般的には、上記のように表わされる現時点の効用だけでなく、将来の各時点における効用をも考え、それらの現在割引価値の合計をもって個人の総効用と規定される。そして、そのように規定された効用関数を一定の制約条件(例えば一定の収入額)のもとで最大化するのが個人の行動である、という定式化をすることによって経済の動きを分析するのが現代経済学の主流である。つまり、その場合の目標関数は下記のようなものになる。

$$U_s = \int_s^{\infty} U(c_t)\ e^{[-\theta(t-s)]} dt$$

ここで、U_s はある個人の時点sにおける効用(すなわち満足度)、uはその個人のある一時期における効用、cはその個人の当該期における消費量、θは時間選好率(主観的割引率)、sはある一時期、eは自然対数の底(ネイピア数)をそれぞれ示す。そのような発想による定式化(micro-foundation of economics)がなされない論文は、

標準的な論文とみなされない場合が多いのが実情である(岡部 2012b:30−40 ページ)。

上記の枠組を用いると、橘木（2013）の議論は、効用関数として上記（1）式でなく次の（1a）式のような関数を前提していると解釈することができる。

$$U \ = U\left(x_1^a, x_2^a, \cdots, x_n^a; x_1^b, x_2^b, \cdots, x_m^b\right) \qquad (1a)$$

ただし、U^aはその場合の効用関数であり、x_j^a（$j=1,\cdot\cdot\cdot,n$）はカネで買える財またはサービスの消費量、x_k^b（$k=1,\cdot\cdot\cdot,m$）はカネで買う必要のないサービス（例えば趣味等）の消費量をそれぞれ表わす。

すなわち、橘木（2013）は、今後余暇を楽しむことの大切さを強調しているが、その内容としてはx_j^aに分類されることがら（入場料支払いを要する漫才や落語、相当大きな費用がかかる旅行や観光等）だけでなく、x_k^bに分類されるあまり費用のかからない楽しみ（スポーツ、音楽、絵画等）も重視している点が、従来の経済学の視点からはみ出て新しい視点を持ち込んでいると理解できる。一方、橘木（2013）が前提するこの効用関数では、上記の前提（c）すなわち上記（2）式が示す関数の性質（多ければ多いほどよいという前提）は維持されている。

つまり橘木（2013）は、幸せはカネで買えないものもあるとする点（上記（1）式を（1a）式のように拡張したこと）で主流派経済学の発想から一歩踏み出ているものの、個人にとってはカネで買えないもの（自分が享受できるモノや事柄）の量が多ければ多いほど望ましい（より幸せである）という考え方、すなわち「もらう幸せ、受ける幸せ、あるいはできる幸せ（趣味やスポーツなど）」という考え方（上記（2）式）は崩さずに踏襲している。この二つが特徴といえる。なお、本文３節で述べたとおり、幸せには「もらう幸せ、できる幸せ、あげる幸せ」の３つの発展段階があると理解する（高橋 2008 : 116 ページ）ほうがより適切であるが、橘木（2013）においては「あげる幸せ」は考察の射程外に置かれている。

［引用文献］

秋山美紀（2013）『コミュニティヘルスのある社会へ―「つながり」が生み出す「いのち」の輪』岩波書店。

井上信一(1994)『地球を救う経済学―仏教からの提言』鈴木出版。

大江守之・岡部光明・梅垣理郎（編）(2006)『総合政策学―問題発見・解決の手法と実践』慶應義塾大学出版会。

岡部光明（2009)「経済学の新展開、限界、および今後の課題」明治学院大学『国際学研究』36 号。
<http://gakkai.sfc.keio.ac.jp/publication/dp_list2009.html>

岡部光明（2012a)「経済学的世界観の強さと限界―経済学における人間の行動前提の再考そして対応方向―」明治学院大学『国際学研究』41 号。
<http://gakkai.sfc.keio.ac.jp/publication/dp_list2011.html>

岡部光明（2012b）『現代経済学を超えて―私の経歴と考え方の発展―（明治学院大学最終講義)』慶應義塾大学出版会。

岡部光明（2013）「幸福度等の国別世界順位について：各種指標の特徴と問題点」明治学院大学『国際学研究』43 号。
<http://gakkai.sfc.keio.ac.jp/publication/dp_list2012.html>

シューマッハー、E. F.(1986)『スモール・イズ・ビューティフル―人間中心の経済学―』(小島慶三・酒井懋訳）講談社学術文庫 730、講談社。(E. F. Schumacher, Small is Beautiful: A Study of Economics as if People Mattered, 1973)

中村 元（1981)『佛教語大辞典 縮刷版』東京書籍。

西川 潤（2011)『グローバル化を超えて―脱成長期 日本の選択』日本経済新聞出版社。

高橋佳子（2002)『「私が変わります」宣言―「変わる」ための 24 のアプローチ』三宝出版。

高橋佳子（2005)『あなたが生まれてきた理由』三宝出版。

高橋佳子（2008)『12 の菩提心―魂が最高に輝く生き方』三宝出版。

高橋佳子（2009)『Calling―試練は呼びかける』三宝出版。

高橋佳子（2011a)『魂の冒険―答えはすべて自分の中にある』

高橋佳子（2011b)『果てなき荒野を越えて』三宝出版。

高橋佳子（2011c)『魂の発見―時代の限界を突破する力』三宝出版。

高橋佳子（2012)『彼の地へ―3.11 からのメッセージ 』三宝出版。

高橋佳子 (2013)『希望の王国―地図にない国を求めて』三宝出版。

橘木俊詔 (2013) 『「幸せ」の経済学』岩波現代全書 002、岩波書店。

辻 信一 (2008)『幸せって、なんだっけ―「豊かさ」という幻想を超えて』 ソフトバンク新書 072、ソフトバンク クリエイティブ。

堂目卓生 (2008)『アダム・スミス―「道徳感情論」と「国富論」の世界』中公新書 1936、中央公論新社。

安原和雄(2000)『足るを知る経済―仏教思想で創る二十一世紀と日本』毎日新聞社。

Besley, Timothy (2013) "What's the Good of the Market? An Essay on Michael Sandel's 'What Money Can't Buy'", Journal of Economic Literature, 51(2), 478-495.

Luks, Allan (1988) "Helper's High: Volunteering Makes People Feel Good, Physically and Emotionally," Psychology Today, October.

Sandel, Michael (2012) What Money Can't Buy: The Moral Limits of Markets, Farrar Straus & Giroux. (『それをお金で買いますか―市場主義の限界』鬼澤 忍 (訳) 2012 年、早川書房)。

Sen, Amartya (1985) "Well-Being, Agency and Freedom: The Dewey Lectures 1984," Journal of Philosophy, 82(4), 169-221.

Schwartz, Barry (2004) The Paradox of Choice: Why More Is Less, HarperCollins Publishers.